

綜楽流尺八の誕生と

尺八博士の活躍

中島聖山

前号では室蘭出身の女流尺八家である鈴木藤枝（旧姓佐藤）の活躍について、上京や訪欧を中心述べたが、今回はその後のアジア諸国での演奏活動と流派創設までを追ってみたいことにする。

また、北海道の竹友社にとって草分け的存在ともいえる、北海道大学名誉教授の松村松年博士の活躍について触れ、北海道大学邦楽部のルーツをたどってみることにする。

女流尺八家・鈴木藤枝の台湾演奏旅行

ヨーロッパの尺八行脚から帰国した翌年の昭和8年1月23日、鈴木藤枝はチェロと尺八を携えて東京港を出発し、蓬萊丸で一路台湾の基隆へ向かった。台湾の婦人矯風会の招きによるものであったが、ちょうどその頃台湾では宮本信一や関段敏男らが中心となって、台中琴古会設立の準備が進められている時であり、演奏旅行者の受け皿ができていたので、彼女にとっては絶好の機会であった。

昭和8年1月26日午後、蓬萊丸は無事台湾の北端の港である基隆に入港した。翌日の新聞はヨーロッパ生活を体験した女流尺八家が、東京から渡台したことを写真入りで報道した。台湾訪問ということで、暖かい南の島

の男が脇の下に入ったという。台中の琴古会の面々は特に背が低く、宮本・関段・小川・木原ともに5尺2寸以下だった。

2月3日の台中で開催した鈴木藤枝歓迎演奏会では、鈴木女史を中心に左右に男2人ずつ並んで演奏したため、ことさら体格の差が気になったという。

1月31日の夜、台中の割烹で報道関係者や三曲関係者も含めた琴古会主催の晩餐会があったが、彼女は量の多いことで有名な台湾料理を平らげ、宮本宅へ戻ってから更に大きなバナナを14〜15本とミカン2個を食べたというから、並大抵の大食漢ではなかったようである。

花火3発を打ち上げて開場した2月3日の台中座における歓迎演奏会は、節分とぶつかったにもかかわらず、ほぼ満員の盛況で終わった。翌2月4日は台中州青果同業組合事務所の2階で、欧州行脚の体験をテーマに講演を行ったが、これも大変な人気を博した。

こうして、台湾縦断の演奏旅行は大成功に終わった。2月末日の帰国予定を遙かに過ぎた3月17日、彼女は無事東京に着き、4月上旬からは東海方面へ演奏旅行に出発した。

朝鮮・満州への演奏旅行

ヨーロッパから帰国し、女流尺八協会を設立して尺八指南の看板を掲げた彼女ではあったが、東京で門人育成に専念する時間など無かった。東海方面の演奏旅行を終えて帰郷した彼女は、今度は軍部の慰問と各地での演奏を兼ねた朝鮮・満州巡演の旅の準備に追われる身となった。

朝鮮・満州巡演の旅も台湾同様、東京女子大学卒業生で組織する桜楓会や愛国婦人会の招待によるものだった。9月13日東京を出発

した彼女は、9月16日釜山公会堂での演奏会を皮切りに、軍部の慰問を主としながら、各地でチェロと尺八の演奏を披露して拍手喝采を浴びた。彼女は愛国婦人会の英雄的存在であり、東京女子大学卒業生の異色タレントとして各地で熱烈な歓迎を受けた。

昭和8年10月22日にハルビンで開催された日満露国際演芸大会は想像以上に盛況なもので、満州側の入場券発元枚数は3千3百枚にものほり、日露の発売枚数を加えると5千枚以上にもなったというから、歴史的行事だったと云ってもいいのではないだろうか。彼女の前評判はたいしたもの、満州国の皇族にも知れ渡る程であり、10月24日午後5時30分からは、新京で溥儀執政の御前で演奏する光栄に浴したのである。

同年10月下旬帰国した彼女は、その足で金沢市を訪問し、11月3日の金沢愛国婦人大会の大会に出席した。

綜楽流尺八を創始し宗家となる

ヨーロッパの尺八行脚、台湾・朝鮮・満州などアジア地域での巡演と、地元東京に腰を落ちつかせる暇の無かった彼女であるが、昭和9年5月27日には、神宮外苑にある日本青年会館で初めての独奏会を開催した。当日は本曲「鹿の速音」や三曲合奏曲「青柳」など数曲を演奏したが、彼女の大きな音に聴衆は魅了されたというから、プロの尺八演奏家として立派に身を立てられるだけの力量を有していたものと思われる。

昭和12年、彼女は綜楽流尺八を創設して自ら宗家となった。綜楽の綜とは総合の意味であり、楽は音楽の楽である。つまり尺八で邦楽・洋楽を問わず全ての音楽を吹奏する流派ということである。彼女が新しい尺八の流派を樹立したのは当

然とも云えることで、初心を貫き究極としてたどりついたところといわざるを得ない。というのも、彼女が尺八を吹きはじめた動機が男女差別に対する挑戦であり、邦楽・洋楽を問わない真の音楽の創造だったからである。

邦楽と洋楽を同時に勉強し、尺八とチェロを演奏することになったいきさつを、彼女は雑誌「三曲」の昭和12年4月号で次のように述べている。

「一体に日本音楽家というものは尺八家ばかりではないであろうが、少し偏くつて排他的なきらいがある。自分のやっている音楽のみの塔に立てこもって、一歩も踏み出して他

のものを研究してみようという度量がない。(中略) また、一方西洋音楽家と言うものは此の向上心のない、いつも同じ事ばかりしている日本音楽家を軽蔑の目で見ている。さ

もさも自分達は日本音楽なんかやっている人々とは人種が違っても云うかのように高慢ちきである。しからば彼ら西洋音楽家とは何かというと、これは単に西洋人の模倣ばかりしている人種ではないか。私は此の2つの対象を見て、何時も苦笑せざるを得ない。こうした意味から私は東西音楽を極めてみよう

と決心したのである(後略)」
こうした気持ちに忠実に従い、日本音楽として尺八を勉強し、西洋音楽としてチェロを勉強したのである。どちらも本場で勉強すべきであるとの考えから、上京し尺八の腕を磨き、パリでチェロを習ったのである。4年間のヨーロッパでの生活は彼女のこだわらな

い、何事にも積極的に向つた拍車がかけるとともに、婦人の地位向上と欧州志向という世の中の流れに乗って、彼女は男性尺八家を尻目に思う存分活躍することとなったのである。

しかし、残念なことに、こうした彼女の音楽活動が定着した痕跡がなく、綜楽流のその後の様子や彼女の晩年などについても不明である。

松村松年尺八博士の来道

のちに尺八博士の異名で呼ばれる程の尺八狂だった世界的昆虫学者の松村松年は、明治5年3月5日に兵庫県明石郡大明石町東片端で生まれた。明治20年9月に東京明治学院予備校を経て北海道に渡ったのが、彼と北海道との最初の出会いであった。翌明治21年1月には札幌農学校予科3級に入學し、同24年7月に卒業して同校農学科に入った。この頃から昆虫に関する研究を始め、論文を発表する。彼が尺八を手にするようになったのは16才というから、教養年であれば明治20年である。この年の9月に来道しているから、手ほどきは東京の子備校時代に受けたのか、それとも札幌に来てから受けたのかとの疑問がわく。後日、川瀬順輔や水野呂堂の楽譜で勉強したとあるので、琴古流荒木派だったことは間違いないが、明治20年であれば川瀬順輔はまだ山形に在る頃であり、直接手ほどきを受けることは出来なかったはずである。



松村松年

当時、すでに札幌に琴古流荒木派の師匠がいたのだろうか。大正後期に函館の長谷川羊童が荒木派の幹部として活躍を始めるが、彼も道内では師匠を得ることができず、はるばる東京まで勉強に出掛けていたのである。いずれにしても、松村松年がこの誰に師事して尺八を始めたのかは定かではない。

明治29年7月、弱冠24才の若さで、札幌農学校の助教に昇進した彼は、農学研究のため明治32年から3年間、ドイツに留学することとなった。上手ではなかったが尺八が好き

だった彼は、25銭で新しい尺八を買い、それをトランクに入れてドイツへ留学した。

明治35年10月帰国した彼は、札幌農学校教授となった。帰国後まもなくある演奏会で尺八を演奏したところ、その翌日、自宅のポストに学生から「先生の尺八は脱線だらけで、殆ど聞くに耐えませんが、今後絶対に公衆の面前にかかりますから、今後絶対に公衆の面前では止めて下さい」という文面の投書があった。

これを受け取った松村松年は、眠れぬ一夜を明かし、遂には石にかじりついても天下の名演奏家になってみせると決意したのである。それからというもの、毎日2-3時間の稽古を欠かさず、妻に山田流の筆を習わせて合奏練習も行った。地元の方である山田流の新田佐美治先生などを自宅に招いて、徹底した合奏研究も行った。

北大千鳥会の結成

研究の合間を縫って血の出るような稽古を重ねるうちに、彼の演奏技術は向上するとともに、いつしか誰ともなしに彼を「尺八博士」と呼ぶようになつていった。

約10年間の精進を続けるなかで、北大千鳥会という邦楽愛好家の会を組織し、毎年1-2回演奏会も開催できるようになった。当時は箏曲のほかに長唄も入れ、北大中央講堂で公開演奏をしていた。長唄の芳村伊十郎や尺八の川瀬順輔、地唄の川瀬里子らと合奏し、親交を深めたのも此の頃だった。

千鳥会は教授のための組織ではなく、あくまで愛好家が集って公開演奏する程度のものであった。しかし、大正後期になって都山流の畑中康山や琴古流鈴集会の藤沢鈴昭、同じく琴古流竹友社の齊藤玉洞、上田流の青木呂薩らの活躍により、北大には多くの尺八愛好会が誕生した。都山流の北大康琳会では蘇武・五十嵐・春田らが中心に活躍していたし、琴古流鈴集会の北大鈴韻会は松本精一・阿部谷

おこと・三味線——邦楽専門

傑屋楽器店

〒001 札幌市北区新川3条14丁目3-12

☎ (011) 761-9057

● 札再カード・ローンをご利用ください。

人・久保義雄らが柱となっていた。また琴古流竹友社の北大八千代会は佐伯直臣が中心であり、松村松年博士と同派であることから千鳥会を吸収、引き継ぐ形となってもっとも勢力のある同好会だった。上田流の北大美登里会は佐伯才一や山岡敏郎が会を支えていた。

大正9年1月27日に開催した北大八千代会の演奏会は、翌日の北海タイムスに大きく取り上げられた。出演者も多く松村松年博士の他に、荒木・原・堀江・出口・加藤・小林・中島・那須・小田・小笠原・緒方・岡崎・小野寺・高山・吉田など多数の名を連ねている。また、大正15年5月22日と23日の両日、札幌豊平館で行われた北大八千代会、玉声会連合大会には、東京の川瀬順輔、川瀬里子が出演し、盛大に催された。

第一回北大邦楽会

北大学生の中に尺八各流派の愛好会が組織され、競って活動するようになった大正13年11月30日、第一回目の北大邦楽大会が北大中央講堂で開催され、聴衆は1400人が参集した。

演奏曲は三曲合奏曲、長唄、古典本曲など全部で15曲だった。演奏も都山流・琴古流・上田流と全流派が出演した。当時の札幌市の人口は14万人程だったが、その1%が聴衆として集まったのだから、大成功といえるだろう。

都山流では平野康嶺・五十嵐康亭・春田康汀らが「摘草」を演奏し、日賢光輔が「楓の花」を、そして、蘇武康涯が長唄「岸の柳」を演奏した。

上田流では佐伯呂悦が「稚児桜」を演奏し、琴古流では高山保二・松本精一・手島・佐伯直臣・久保茂雄・阿部谷人らが演奏した。長唄では石井硯が「土蜘蛛」を暗譜で演奏し、注目を集めた。演奏会の最後は高橋北雄（空山）が古典本曲「阿字観」を吹奏し、尺八の魅力をも十分に聴かせた。橋本賀寿井社中が地

元糸方として賛助出演した。

その後も北大邦楽大会は継続開催され、昭和2年11月3日には、地元の新田佐美治社中を糸方として、北大中央講堂で松村松年博士司会のもと実施された。

NHK札幌放送局開局3周年記念放送

昭和6年6月5日から一週間の日程で、NHK札幌放送局の開局3周年を祝う記念放送があった。第1日目は午後7時25分から日本放送協会北海道支店理事長の大瀧甚太郎が挨拶をし、続いて吾妻札幌通信局長が記念講演をした。記念講演の後は午後8時から邦楽演奏に移り、謡曲「羽衣」、長唄「四季の山姥」と進み、初日の最後は松村松年博士の尺八独奏で締めくくられた。この時博士は愛用の2尺管で古典本曲「奥州鈴慕」「里神楽」「阿字観」の3曲を独奏した。これが尺八博士の名を欲しいままにした松村松年の最後の公開演奏となった。

当時、ラジオでの邦楽番組は多く、特に新日本音楽と称した宮城道雄作曲の新作に人気が集まった。5月2日午後8時からの邦楽の時間には、新日本音楽と題して「春の海」「春の夜の風」「山の水車」「朧夜」の4曲を尺八畑中康山、箏大久保雅震で放送しているし、5月20日の午後7時25分からの邦楽の時間には、札幌市公会堂から中継で新日本音楽「軒のしづく」を箏横山光喜勢・岩間多喜井・川上喜志井、三絃大野山喜井・高橋喜代井、尺八藤沢鈴昭で放送している。

このように世の中が新日本音楽に傾斜していたさなかに、自分の最後の公開演奏を古典本曲独奏で飾った尺八博士の心意気は、正に尺八家の中の尺八家と云っても過言ではないように思える。

最後の訪欧と尺八

昭和7年1月下旬、博士は退官を間近に控えて、最後のヨーロッパ訪問に旅立つことに

なった。目的はフランスのパリで開催される

第5回万国昆虫会議に出席するためだった。博士は神戸から船で訪欧する予定だったが、途中東京で下車し、尺八仲間との壮行を受けた。博士の壮行会は1月23日夜、東京会館の和室で行われ、松本学前社会局長官や秋津島清美力士など12名が参集し、夜遅くまで尺八談義に花を咲かせた。尺八家としては中島雅楽之都・青木鈴慕・谷狂竹・川瀬順輔・中塚竹禪・藤田鈴朗など日本的に有名な人物が一堂に会し、博士の道中の無事を祈った。

この時、尺八博士は答礼として愛用の2尺3寸管を吹いた。旅行用のトランクには、他に2尺管も入っていたという。



松村博士送別会

東京でのこうした人脈を見ても、いかに彼が中央の尺八界に認められていたかを窺い知ることが出来る。北大の邦楽愛好会が中央に直結した松村松年博士の手によって創始されたことは、とても意義深いことであり、北海道の尺八界の黎明期を世界的人物が担ってくれたことに我々は誇りを持たねばならない。

使用写真は日本音楽社「三曲」より転載

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽<琴・三絃>の店

川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎代221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。